# 妹から学んだこと

合志市立西合志南中学校　２年　渡島小晴

私には十歳の妹がいる。妹は九歳のとき一型糖尿病になった。今は、不治の病と言われている。はっきりとした原因は分かっていないが、誤解されやすい病気だ。

私ははじめそんな妹を見て、かわいそう。なんで妹がこんな目に遭わなきゃいけなかったんだろう。と思っていた。しかし、妹は「私が病気になったからって特別扱いはしなくていいよ。自分でやりたい。お姉ちゃんは応援して。自分でこの病気と向き合ってみせる。」と言った。私はこの言葉で、妹は自分でやりとげようとしているんだ、私にできることは応援することだ、と思った。同時に妹は自分の病気を悲観していないし、それをかわいそうだと思っていた自分に怒りが出た。

もちろん妹のように強い人ばかりではないし、妹も本当は不安だらけだろう。

それから私は、薬を渡したり、頑張っているところを応援したりした。ポジティブな妹ならなんでも一人で解決できると思っていた。しかし、自分の体調が分かる機械を妹の病気のことをよく知らない人に触られ、毎回説明しなければならないことや飲食店などで必要な表示がないこと、それを尋ねたときの店員さんの様々な反応など、たくさんの壁が常にあることが分かった。さらに自分や家族の気持ちとして、先生や友達、店員さんがサポートしてくれるのに、ありがとうと思うことより先にどうしても申し訳ないという気持ちが勝ってしまうこともある。

前向きな妹を応援したいと思うものの、壁にぶつかっていたり食事の度に針を刺して薬を体に入れている姿を見ると、やっぱりかわいそうと思ってしまう。大好きな妹の痛々しい姿を見るのは辛い。しかし、身近な私たちから、妹と、妹の病気と向き合わなくてはならないとも思う。人が後ろめたいと思う世界が間違っていて、それがなくなるように私たちが変えていかなければならないと思う。

ひとには様々な個性がある。同じ人間などいない。でも、その個性を理解しあって、生きている。妹のクラスメイトはみんな優しくて、学校で妹の具合が悪くなったときはすぐに妹を保健室に連れていってくれる。中には妹の病気についての本を借りたり勉強したりしてくれている友達もいるため、妹は毎日楽しく学校に通えている。しかし今は恵まれているかもしれないけど、全員がそうとは限らないし、いつ大きなトラブルが起こるか分からない。いざそうなると、妹は不安や焦りを感じてしまうと思う。

そのためにも、妹の場合は自分の病気をみんなに伝えていくことも一つの手だと思う。伝えて、理解してもらって、助けてもらう。そして今度は、自分が相手の個性をしっかり理解して助ける。病気だけに限らず、物事を正しく知って理解

することが一番大事だと思う。妹のクラスや学校は、これが自然にできるから楽しく過ごせているのだと思う。妹のクラスメイトが手伝ってくれたのは、『病気だから』ではなく、『大切な友達だから』してくれたことだと思う。妹も自分が病気でも特別扱いをしないで前と変わらずに接してほしいと思っていた。きっとこれが、本当の人権なのではないかと思う。

妹の病気や妹のクラスメイトの行動から、新たな人権を学んだ。私はずっといじめや差別をしないことだけが人権かと思っていた。でも、妹の姿を通して、“どんな人でも平等に生きる権利”ということに気づいた。物理的にも心理的にもバリアフリーな世の中が実現できればいいと思うが、まだそこに達していないものが山ほどある。これからも病気だからということは関係なく『大切な妹だから』優しく見守り、ずっと変わらず妹と歩んで、世の中には妹のような人がたくさんいるということを忘れないで過ごしていこうと思う。